
役者がためにオレは死ぬ。

にた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

役者がためにオレは死ぬ。

【Nコード】

N2925F

【作者名】

にた

【あらすじ】

新人役者の神谷剛が、初の映画主演の話を受ける。その映画を撮るにあたってオーディションがあるという。そのオーディションの内容とは…。

シーン1（前書き）

感想、訂正などありましたら教えてください。
がんばります。

シーン1

「おはようございます。」

おれは、最近この芸能事務所に入った新人役者だ。

名前かみやつよしは神谷剛。

高校時代は何かと悪いことばかりをし、みんなと見たVシネマに憧れて高校卒業後いくつか履歴書を送り、今の事務所に見事合格したのだ。

「おう、神谷！社長が呼んでたぞー。」

事務員の前山さんだ。

前山さんはよくご飯に連れていってくれたりする面倒見の良い中年男性（41）だ。

ただ単に、独身で寂しいだけっていう噂もあるけど、実際この人に助けてもらっている人は多い。

「わかりました、すぐに行ってきます！」

おれは社長室に向かいノックをした。

コンコン

「神谷です。」

『おう、入れー。』

ガチャ。

ドアを開けると事務所の社長がイスにもたれて、どっしり構えていた。

「神谷、突然だけどお前に映画主演の話がきてるんだが。」

「まじっすか！？やります、やりまーす。」

おれは、チャンスとばかりに食いついた。

事務所に入ってエキストラやチャイ役なんかやってきたがやっとま

ともな仕事が映画主演なんて、やっぱり見る奴が見るとわかるんだな
い。

「それで、映画を撮るにあたってオーディションがあるらしんだが
…大丈夫か？」

「なーに言ってるんすか、たとえ根性焼き100束されたとしたって
耐えてみせますよ！」

「…よし、じゃあ明日の朝9時に向こうの映画会社に面接行ってき
てくれ。」

「わかりました！はりきって行ってきます！…じゃ、失礼しま
す！」

ガチャ。

おれはハイテンションで社長屋を出た。

（くうー、映画主演なんて最高じゃねーか！どんな映画なんだろう。
ここでヒットしたらオレも名優の仲間入りだな。くくくつ！）

社長屋の前でたまらずガッツポーズをした。

すると前川さんが前から歩いてきた。

「何だ神谷、うれしそうだな！良い知らせだったのか？」

「前川さん、おれ映画主演決まるかもしれません！くくくつ。」

「何！！？お前それ・・・ヒットしたら飯連れてけよ！！！絶対だ
ぞ！！！！」

「何でも食わしてあげますよ！！ふふふふつ。」

それからしばらく舞い上がって話し続け、明日のために早めに寝
た。

そして、次の日の朝おれはその映画会社に向かった。

「東勝プロダクション…ここか。案外小さい会社だな…。」

入り口付近には警備員らしき人がいた。

「あの、映画の依頼で来たんですが…。」

おれはその人に通行書を見せた。

「確認しました。どうぞ。」

当たり前だが、すんなり中に入れてもらった。

ここからが正念場だ、オーディションとやらで監督に気に入られて映画主演をゲットするぜ！

「えーつと…2階の応接室03…おつ、あつたあつた。」
ドキドキ。

コンコン。

「す、すいませーん。今日オーディション受けさ、させてもらいます神谷剛です。」

「……………おつ、入れや！」

「は、はい。」

ぶっくらばうな返答に戸惑いつつドアを開けた。

そこには30代半ばの男がいた。

見た目はまあ…やんちゃ好きそうな強面の…まあ、ぶっちゃけヤーさんみたいな人だった。

おれは、映画主演とかそんな事は吹っ飛び、一気に帰りたくなった…。

「おー神谷くーん、来てくれてありがとうねー、いやいや履歴書見て気に入っちゃったよー。高校時代とかやんちゃだったらしいねーペラペラ…」

いきなりその人のマシンガントークが始まった。

「はあ…ええ…そうですね…」

（なんだよコイツ、早く監督をだせ！！…いや、もしかしてコイツが）

「ペラペラあつ、遅れてごめん僕が監督の平塚力です。」

（…やっぱりかーい！！！！）

「で、あのオーディションは…」

「おう、そうだったそうだった。今回僕さあ、任侠もの撮りたくてさあ…若くして組をまとめる主役の人が欲しかったんだよー。んで、売り込みに来てもらったときにキミの履歴書とかいろいろ気に入っ

ちゃってね。キミならリアルな映画撮れると思ってオフアーしたんだよー。

で、オーディション内容なんだけど、この町を統一して欲しいんだわ。」

「あー…はい？」

「まずは、ここから始めてもらうから。」

そういうと、平塚監督は紙袋を渡してきた。

中を見ると高校？の制服が入っていた。

「あ、あの、これは？」

「高校の制服だよ。すぐその青空高校の。まずは高校制覇してからハバ広げた方がやりやすいかなと思ってね！」

（えー！ー！ー！ー！それって最終的にヤーさんになれってこと！！？…………。）

「…あの、やつぱりこの話は。」

「おい！今更できねえじゃ話になんねーぞー！もう、ギャラは払ってんだ！ー！」

（この人やっぱ本物だ！ー！あのバカ社長！ー！ー！）

「や、やります。」

おれは半ベソ状態で返事をした。

断ればこの場で殺されそうな気がした。

いや、本気で…。

そして、おれは高校生に戻るようになった。

シーン2

青空高校。

おれは地元から上京してきたため、何の縁もないこの町で0からのスタート。

つまり大暴れしろってことだな。

へっ、やるからには死ぬつもりで行くぜ！

「えーっと、学生証には3 Aって書いてあるな…。あ、なあ3 Aってドコ？」

「あー、3 Aなら4階の東館っすよ！」

「サンキュー！…あー…東館わかんねーから連れて行ってくんねえ？」

「ま、まじっすか！？…じ、じゃあ下までなら…。」

「？」（なんだコイツ、何でびびってんの？）

それで、おれはこの青高の生徒Aに連れていってもらった事にした。

「あ、あれが東館っす。」

「ん？窓ガラスほぼ割れてんじゃん。」

「東館は、檻みたいなもんで、凶暴なヤツや狂ったヤンキーたちがまとめられたクラスばかりで、ケンカは日常茶飯事、たまに救急車もくるくらい荒れてるんす。」

（おいおい、初っ端ハードル高くないか…。）

「じゃ、授業始まっちゃうんでおれはこれで失礼します。」

「お、おう、案内ありがとな。」

そっいうと青高生徒Aは走って行ってしまった。

おれは覚悟を決め、東館に入った。

中は落書きとゴミだらけだ。

階段を上り、4階についた。

3 A。

教室の前に立つとやけにシーンとしている。

ガラ。

ドアを開けると、無造作に並べられた机があり、誰もいなかった。

（何だよ、まだ誰も来てねーじゃねーか。）

適当に窓際の一番後ろの席に座る。

（先生すら来ねーし、…暇だな。）

「くあゝあ。」

思わずあくびが出た。

ガラ。

すると突然、誰かが入ってきた。

「…誰だ、お前？」

見るからにヤンキーなリーゼント野郎だ。

「今日から転校してきた神谷だ。よろしく。」

すると、リーゼント野郎は近づいて来た。

「おう、おれ桑田よろし、く！」バコツ！

リーゼント野郎は、いきなり殴りかかってきた。

「ぐあつ、…テメー。」

「そこおれの席なんだよ！」ビュン！

そいつの右フックがまたおれに目掛けてきた。

「おい、あそこ誰か倒れてんぞ。」

「まじだ、朝っぱらからよくやるな〜！」

「って、おい！あれ桑田じゃねえか！？」

「おい、桑田！どうした！？大丈夫か！？」

「…転校生だ。…すげえ…強え…。」

「あん？高校生？？」

ガラッ

ドアを開けると、そこには平然として座っている神谷がいた。

「おいテメー、転校初日からいい度胸じゃねーか！！！」

「やめとけ、桑田だってそんなにケンカ弱えほうじゃねえだろ。おれたちじゃどうにもなんねえよ。」

「…今日から青校に入った神谷だ。お前ら、おれの下についてくねーか？」

「なんだとテメー！」

「桑田ってやつはおれの下につくって言ったぜ。」

「！！！？」

「じゃあ、1人ずつタイマンはって、負けた方が下につくってのはどうだ？」

「…じ、上等じゃねーか！やってやるよ！！」

「フン、…じゃあ、行くぜ！！！？」

ドスッ！！

「ぐあっ…はあはあ。まだ…負け…。」ドサッ。

「もう一人のやつ、かかってこい。」

「いや、おれは止めとく。」

「賢いやつだな。おい、コイツの名前は？」

「白田。」

「…お前は？」

「屋代だ。」

「…へ、よろしく。」

それから神谷は、次々と現れる3 Aの生徒を撃退していった。

総勢22名、内リタイア1名

その日、3 Aは全滅した。

シーン3

ガラス。

『おはようございます!!』

朝っぱらから男共のムサイ声が響く。

「うわ!なんだ、お前ら暑苦しいな!」

「自分ら、神谷さんの強さに惚れました!これから3 Aをよろしく願います!」

(まさか初日からこんなにうまくいくとはな...)。

「おー、とりあえず堅苦しいのはやめにしようや。...で、おれは3 Aのトップじゃねえ。青校のトップだ。んで、いずれはこの町のトップに立つ!」 「...神谷さん、それはいくらなんでも...。」

「え?何で??」

「おれが説明するよ。」

「おう、お前は...屋代だっけ?」

「ああ。まず、この学校のトップは3 Bの熊上だ。そいつを倒さねー限り青校のトップは無理だな。そして、この町には敵対する高校が2つ黄山高校と赤木学園。この3つの高校をまとめたやつなんて聞いたことがねえ。つまり、勢力はみんな互角なんだ。」 「ふーん。じゃとりあえず3 Bの熊上つつーやつをぶっ飛ばしやいいんだな?」

「それができればな...。」

「...なんでできねえんだよ?」

「熊上は今、暴力事件で鑑別所入ってんだ。東館のガラスだけ妙に割れてるだろ??熊上がいなくなつてまとまらずに暴れまくつてんだよ。」

「でも何でうちのクラスはガラスとかきれいなんだ?」

「A組とB組は派閥違いなんだよ。A組はB組に関わろうとはしね

えし、B組のやつもバカじゃねえ。トップがいなくなった今、A組に攻め込んで来るやつはいねえんだよ。」

「ふーん、じゃおれが昨日みたいに一人一人ボコボコに倒しやいいい。」

「アホ！それじゃお前の体が持たねー。今日だって拳握るのも辛いはずだ。」

「…む、むう。」

「とりあえず今は熊上が帰ってくるのを待つ！お前の拳も休めとけ。」

「屋代：お前、案外いろいろ考えてんだな。」

「…おれだつてお前の強さには惚れてんだ。トップになるんだつたら協力くらいさせろ。」

「ああ、頼んだ！」

神谷は満面の笑みで返した。

すると屋代を含め、クラス全員が笑みを浮かべた。

神谷は、その瞬間3 Bの仲間に惚れた。

数日後。「大変だ！」

A組の一人が教室に飛んで入ってきた。

「どうした？そんなに慌てて。」

「赤木学園の奴らが攻めてきた！！」

「はあ！？どういうことだ！！？」

「何か昨日、B組のやつらが町で赤学のやつらをボコボコにしたらしくて。『熊上か屋代連れてこい』って叫んでるんだよ！！」

「どーする屋代！？」

「くそつ、熊上がいねーからつてむやみに暴れやがつて…。おれ一人で行く。神谷達は来なくていい。」

「でも…おれたちも行くよな！？神谷！」

「…屋代。」

「…大丈夫だ。」

「…わかった。待ってるよ。」

ガラッ

そついうと屋代は教室を出て行った。

教室にはしばらく沈黙が流れた。

シーン4

「…神谷さん、何で一緒に行かなかったんすか？おれら…仲間じゃないんすか！？」

「…仲間だから信じて待つんじゃないか。あいつが大丈夫って言っ限り、おれたちは信じてまたなきやいけねー。」

「…神谷さん。…わかりました。おれたちも信じます！」

それから1時間後。
ガラッ。

「ん？屋代！！大丈夫か！？」

「…ああ、何とか話し合いで決着つけた。」

「あいつら何て！！？」

「昨日ケンカしたのがB組の新井らしいんだ。だから、今日の6時に廃工場の駐車場で新井と赤学の城崎がタイムン張ることが決まった。…」

「！！！！」

「???…城崎って誰だ??」

「そうか、神谷さんは転校して来たばかりで城崎のこと知らないんすね。城崎ってのは赤学のトップはってるやつです。武闘派で赤学至上最強の男って噂ですよ。」

「ふーん。で、屋代、その新井ってやつは大丈夫なのか？」

「ああ、今いきさつを伝えてあいつも了承したよ。」

「そうか。新井には気の毒だが、それで済んで良かったな！」

「まあ、下手したら学校同士の戦争になりかねねえからな。」

「…やっぱ、屋代はすげーよ。おれだったら落ち着いて話し合いかなん何かできねー。」

「ははは。だろうな！」

次の日。

「くそ！やられた！！」

「ふぁゝあ。どうした屋代、朝っぱらから。」

「新井がやられた！」

「んゝくあつ。それは昨日からわかりきってたことだろ？」

「…バカ！赤学のヤツらに騙されたんだよ！！新井のヤツ集団でボコられて、今入院してるらしい！」

「ああ！？どういうことだ！！！！赤学のトップってのはそんな卑怯なことすんのか！！！！？」

「おれだつてわかんねーよ！！城崎がそんなヤツだなんて知らねーしよー！！」

「…おれが赤学行ってくる！！」

「神谷！お前が行つても城崎が出てくるとは思えねー。」

「じゃあどうすんだよ！！！！」

「…おれも行く！」

「…案内よろしく！」

「…場所わかんねーんじゃねーか。」

そして、たった2人の青色が赤い集団の巣に飛び込んでいった。

「叫ぶぞ屋代。」

「…ああ。」

『おらあああ、城崎いいいい！！！！出てこいいいい！！！！！！！！！！』

その声に反応して、赤い集団が50人近く集まってきた。

「何だてめえら！青校が何の用だ！！」

「わざわざ学校に乗り込んでくるとはいい度胸じゃねえか！！」
「殺すぞ！！」

「うるせー、トマト集団。…おい、城崎だせや！！」

すると、集団の奥から男が出てきた。

「おー、おれが城崎だ。」

神谷はずかずかとその男に近づいていった。

「てめー、卑怯なマネしやがって…。」

「あん！？」

「タイムン張れや！」

「何だお前！？この事、熊上はしってやってんのか？」

「…知らねーよ。」バキッ！！

神谷の右フックと共にケンカのゴングがなった。
。

シーン5

ドスッ！！

バキッ！

ゴッ！！！！

ガンッ！！！！！！

2人の激しい殴り合いに、周りの赤学の生徒達は圧倒されて声を上げることもままならなかった。

「城崎いいい！てめーは絶対許さねー！！！！」
「上等だ！！ぶっ殺しやるよザコが！！！！」

バキィッ！！

凄まじい音が響いた。

同時に2人の動きが止まった。

ドサッ。

倒れたのは、神谷の方だった。

「はあはあ、なあ城崎。…そんなに強えんだったら集団リンチなんかなくても、うちのやつ一人くらい余裕で倒せたたるーが!!…はあはあ。…おれは、そんな卑怯なやつに負けた自分が、情けねえ。」

ドサッ。

次は城崎が倒れた。

すると、屋代が神谷に近づいてきた。

「神谷：お前の勝ちだ。」

「あつ!!?何言って…。」

「城崎のヤツ気失ってるよ。」

「へっ、すつきりしねえな。ちくしょう。」

「その割に笑ってんじゃねーか。ははっ。」

すると、赤学の集団の中からまた一人、男がでてきた。

「おい、青校。お前確か集団リンチつつてたな。」

「ちっ、なんだコラ!この城崎が昨日、ウチの新井をタイムンはるって呼び出して集団リンチしたから、こうやっておとしまえつけに來てんだろっか。」

「けが人はだまってる。おれは青校の屋代だお前は?」

「赤学の2番目、真下だ。そいつの言ってる事が正しいってんなら、城崎は関係ないぞ。」

「!!!?」

「昨日、城崎は隣県に行つてて帰ってきてなかったからな。」

「じゃあ、誰が!!」

「たぶん、うち（赤学）のやつには間違いないだろう。こっちで調べとく。」

「…じゃあ、おれら悪い事したな。」

「いや、城崎もここ最近退屈だつていつてたし。ちょうど良かった

んじゃねえかな。おれらにとつちや良いもん見れたし。」
「…バーカ、おれたちはハブVSマンガースかってんだ。」
「とりあえず今日は帰れよ。今度はおれたちが青学にお邪魔する。」
「わかった。すまなかったな、真下。…ホレ帰るぞ、神谷。」
「いてててて…。」

たった2人の青高の赤学襲撃はその日のウチに町に伝わった。
神谷達はその後、新井を見舞うために病院に行った。
そこで、城崎はその場にはいなかったことを知らされる。
そして、新井に
「神谷の方が入院した方がいいんじゃないか？」といじられた。
その時、新井は自分がしたことを謝り、
「ありがとう」と告げた。

次の日、数人を除いたB組が神谷の下についた。
そして、城崎と真下が青校に訪問し、新井の件は、赤学の2年がやったことを報告。
その2年には新井に謝罪させた。
後、赤学は青校の傘下に入る事を告げた。

神谷の高校制覇が大きく近づき、町を絞めるという目標に1歩踏み出した形となった。

シーン6

赤学を傘下に加えた神谷だが、まだ自分の学校を支配できずにいた。

神谷の下につくものは多いものの、まだ熊上の下を離れず神谷派に反発している熊上派がその牙城を崩さずにいた。

（早くしねーと映画主演の話が無くなってしまいかも…。）

「神谷。やっぱり青校の上を狙うならもう熊上自体をやる他にないぞ。」

「うん。つつてもその熊上がいらないんじゃない？」

「よお、神谷に屋代。朝っぱらから何の話してんだよ？」

「おー新井。もうケガ大丈夫なんか？」「まだ、ズキズキすつけど医者が今日から学校行ってもいいってよ！で、何の話だよ？」

「いや、熊上がいねーと青高のトップは無理だって話してたんだよ。」

「おー、熊上ね！昨日病院の近くでみかけたぞ！！」

「はあ！？マジか！！？」

「おう、もうあいつ釈放されたらしいぜ！」

「し、釈放って…。あいつ、ここら辺に住んでんの？」

「何なら連れてってやるのか？」

「…家まで、知ってんのかよ。」

（何て便利な奴なんだ。）

そして放課後、神谷と屋代は新井の案内のもと、熊上の自宅に向かった。

「着いた着いた。この家だよ。」

そこにはボロいアパートが並んでいた。

「こんなところに住んでんのか。」

「おい、神谷！屋代！こつちだこつち。」

コンコン。

「おい、熊上ー！新井だ新井ー！いるかー！？」

「バカ新井いきなり呼ぶんじゃねー！！」ボカツ！

「いてっ。なんでだよ、いいじゃねーか別に。」

「……。」

「……………」

「……………」

シーン。

「……なんだ。いねーみてーだな。」

「……帰るか。」

ガチャ。

（……………いた。）

「ん？何だ。新井じゃねーか。」

「ひっさしぶりだな熊上！」

「で、何で屋代と一緒になんだ？それに横のお前は顔すら知らん。」
「とりあえずここで話すのも何だし、公園でもいくか！」
「ん、ああ…ちょっと待ってろ。」

神谷達は改めて公園で話す事にした。

新井は今までの経緯を熊上に話した。

「で、お前はおれを倒しに来たって言うのか？…へっ、バカバカしいぜ。」

「何だとコラ！！」

「神谷つつたか。いいか、おれはもう青校には行かねー。青校支配したいなら勝手にしろ！！」

「…はあ！？」

「わかつただろ！もう帰るからな。」

「おい、熊上！！」

熊上はこつちを振り向く素振りも見せず、そそくさと帰っていった。

神谷達はあつけにとられ、ただ呆然と公園に佇んでいた。

シーン7

次の日、やっぱり熊上は学校に姿を現さなかった。

「ったく、何なんだよあの熊上ってやつ！！拍子抜けもいいところだ！！！！」

「まあまあ、これで青校のトップはお前ってわけだ。喜んでいいんじゃないねえか？」

「納得いくわけねーだろ！まだあいつの下についてるやつだっているんだぞ！それを熊上は学校辞めるからおれの下につけて言ってるようなヤツらか！？」

「…だな、あいつらも一応熊上信じて待ってたんだよな。あいつらだけでも最後まで神谷の下にはつかねーかもな…。」

「だから熊上倒して一気におれの下につけねーと青校はまとまんねーんだよ！」

「…どっちにしろ、一筋縄じゃ行かねーな。」

ガラッ！

「大変だ！！A組のやつらが熊上の事知ってぶっ殺すつつて出て行っちまいやがった！！」

「屋代！！！」

「まあ、こうなるだろうなとは思ってたけど展開が早すぎだぜ！熊上んところ行くぞ神谷！！」

ガラッ。

「わりい神谷、つい口が滑っちゃった。」

「新井！おまえかアホウ！！お前も来い！！！」

そうして神谷達は、熊上の家に向かった。

「よー、熊上！！青校やめるんだってな！！」

「……ま、松井……。植木、白金、山城！」

「なあ、熊上。おれらで青校支配するんじゃないかなかったんか？ああ！
？だからおれらはお前の下に付いたんだろうが！！今更裏切んのか
！！！！」

「……悪い、忘れてくれ。」

カチン。

ピンポーン。

ピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポーン。

「……駄目だ家にいねえみたいだ。」

「どうする、屋代！？」

「どうするって、探すしかねーだろ！！」

「ぐあつ。」

「どうした、反撃しろよ熊上！！」

「はあはあ、うるせえ。もうおれは青校とは関係ねえ！」

「……じゃあぶつ殺してやるよ！！」

ブンッ！！

「待てコラア！！！！！！！！！！」

「！！！！？」

「……お前、昨日の！！」

「神谷、屋代、てめえらには関係ねえだろうが！！」

「こっちは青校のトップ狙ってんだよ！関係大アリだろうが！！！！
大体、リンチなんてガキやることじゃねーか！！！！」

「うるせえ！！何にも知らねー奴が出てくんな！！！」

「だったらお前らは熊上の何を知ってんだ！！？ずっとこいつと居たんなら、何で学校辞めんのかとか考えてやれんだろ！！！！？…それができねーお前らは、ただのガキだ！！！」

「それに熊上！！逃げてるお前もだ！！お前がちゃんと向き合わねーと問題なんて増えてく一方なんだぞ！！！！こいつらの納得の行くはじめをつける！！！！じゃねーと、お前は一生前には進めねー！！！」

「……………！！！！！」

「うるせえつつつてんだろ！！てめえらからぶつ殺す！！どうせ青校のトップになるならお前も屋代も潰さねーといけねーんだ！！！！行くぞ、お前ら！！！！！」

「雑魚に用はねーんだけどな。まあ、やるか屋代？」

「まあ、しょうがねーな。」

シーン 8

バキィ！

ドカツ、ドスッ！！

「ぐああ！」

「なんだ、結構強いじゃねーか屋代。」

「ふうー。まあ、雑魚だからな。」

「お前ら、すまなかつたな。」

「…なあ熊上。何で学校辞めんのか教えてくれねーか？」

「…笑うなよ？」

「ああ。」

「…実は、今付き合ってる女がいてな。鑑別所出て、会いに行ったら『もう、喧嘩はするな』って言われて…。学校にいたら、絶対喧嘩しちまうし…。あんな高校出て就職先なんてあるわけじゃないし…。だから、学校辞めて働こうって。」

「…まあ、そんな理由じゃこいつらも納得はしねーか。」

「……………」

「…なあ、熊上。学校には来いよ。まだまだ青春を謳歌しようぜ！お前の彼女も学校辞める事までは望んじやいねーよ。…お前に喧嘩はさせねえ。約束する。一緒に青校卒業してやろうぜ！な！？」

「…へっ、お前バカだな…。はは、ははは。」

「なんだよ！お前が笑うなよ！！！」

「ははは、神谷くさいよ！ははは！」

「な、屋代まで！！！」

そこには、少しだけ笑い声が響いた。

そして次の日、A組には熊上がもとり、新井、松井がまとめ約に起用された。

この事にA組はざわめいたが、熊上の威圧感によりみんな納得の表情を浮かべた。

そして、赤学の城崎にもその日の内に伝わり、青校と赤学の同盟は完全なるものとなった。

そして、残りは黄山だけとなった。

その黄山も青校の情報を聞きつけていた。

後に、この3つのぶつかり合いは大きな事件になる。

そして、その時はすぐそこまで近づいていた。

「屋代！打てるもんなら打ってみろ！」

「神谷！お前のへなちょこボールは見切った！！」

「何おう！！！」

ビュッ。　カキン！

「なっ！」

「ダメだ神谷！おれが投げる！！どけ！！！！」

「あ、てめー熊上！！」

「行くぞ屋代！」

「何だ、どっちにしろへなちょこボールじゃねーか。」

「何おう！」

ビュッ。　カキン！

「ははは、何だ熊上。お前も打たれてんじゃねーか！」

「ふっ、神谷。お前の方が良い当たりされてたけどな！」

「何だと！！？」

「あゝ あん!!?」

「…喧嘩しねーんじゃなかったのかよ。」

そして、残りは黄山だけとなった。

その黄山も、青校の動きを知らない訳ではなかった。後に、この3つのぶつかり合いは大きな事件になる。しかも、その時は刻一刻と近づいていた。

しかし、神谷はそのことを今はまだ知る由もなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2925f/>

役者がためにオレは死ぬ。

2010年11月14日02時40分発行